

## 学習指導要領の改訂

——「歴史総合」の趣旨——

下山 忍

はじめに

平成三十年（二〇一八）三月に、新しい高等学校学習指導要領が公示された。この改訂にあたっては、平成二十八年十二月に公表された中央教育審議会答申や高大接続に関する議論等を踏まえて検討が行われてきており、平成二十一年に公示された現行学習指導要領以来、およそ九年ぶりの全面改訂となる。今回の改訂は、初等中等教育改革と大学教育改革、そして両者をつなぐ大学入学者選抜改革に一体として取り組む高大接続改革の中で実施される場所にも特徴があり、令和二年（二〇二〇）度からスタートする大学入学共通テストの実施も大きな話題となっている。

今後のタイムスケジュールとしては、令和四年度入学生から年次進行での実施に向かうが、その二年前の令和二年度には教

科書検定があり、令和三年度には教科書採択・供給が始まる。

現在、各教科書会社では教科書編集が進められている最中であるが、学校現場においても、新学習指導要領の実施を見据えた早い段階からの着実な準備が求められていると言えよう。

地理歴史科の科目構成については、「地理総合」と「歴史総合」を2単位の必修科目とし、その上で「地理探究」「日本史探究」「世界史探究」を3単位の選択科目とした。本稿では、そのうち、世界史と日本史を統合した新科目として初めて設置される「歴史総合」の趣旨について、その構成や求められる学習活動を中心にまとめてみた。

### 一 「歴史総合」の構成

「歴史総合」は、A・B・C・Dという四つの大項目からなっている（図1）。「A 歴史の扉」は導入項目であり、高校の歴史学習への動機付けと基本的な技能や学び方を身に付けるものとされ、現行日本史Aの大項目「(1)私たちの時代と歴史」や日本史Bの中項目「ア 歴史と資料」、世界史Aの「(1)世界史へのいざない」に示された「世界史学習の基本的技能」などからの継続性が認められる。

それに続くB・C・Dは、近代化、大衆化、グローバル化という大きな概念のもとに構成されている大項目である。「B

近代化と私たち」は一八世紀後半から、「C 国際秩序の変化や大衆化と私たち」は一九世紀後半から、「D グローバル化と私たち」は二〇世紀後半からというように、近現代の画期を特徴付ける三つの大きな概念をもとに配列している。しかし、B・Cに「(4)〇〇と現代的な諸課題」、Dに「現代的な諸課題の形成と展望」という中項目が設けられていることから分かるように、「近代化」「大衆化」「グローバル化」を現在においても対応が求められる課題として扱い、B・C・Dを単に時系列的に扱っていくのではない点には留意する必要がある。

|   |                         |
|---|-------------------------|
| A | 歴史の扉                    |
|   | (1) 歴史と私たち              |
|   | (2) 歴史の特質と資料            |
| B | 近代化と私たち                 |
|   | (1) 近代化への問い             |
|   | (2) 結びつく世界と日本の開国        |
|   | (3) 国民国家と明治維新           |
|   | (4) 近代化と現代的な諸課題         |
| C | 国際秩序の変化や大衆化と私たち         |
|   | (1) 国際秩序の変化や大衆化への問い     |
|   | (2) 第一次世界大戦と大衆社会        |
|   | (3) 経済危機と第二次世界大戦        |
|   | (4) 国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題 |
| D | グローバル化と私たち              |
|   | (1) グローバル化への問い          |
|   | (2) 冷戦と世界経済             |
|   | (3) 世界秩序の変容と日本          |
|   | (4) 現代的な諸課題の形成と展望       |

図1 「歴史総合」の構成

Dの(4)ではさらに、この科目のまとめとして、Aも含めたこれまでの学習を踏まえ、生徒自らが主題を設定して多面的・多角的に考察・構想し、現代的な諸課題を理解することをねらいとしている。

## 二 求められている学習活動

学習指導要領が求めている学習活動は、大項目の構造を見るとよくわかる。図2は「B 近代化と私たち」の内容を筆者が簡略化してまとめたものである。Bという大項目には四つの中項目があり、(1)は大項目における導入であり、これを踏まえて(2)・(3)を行い、(4)はまとめにあたる。そして、それぞれの中項目にはア・イという小項目が設けられている。これは、資質・能力の三つの柱に沿って、生徒が身に付けるべき「ア 知識・技能」、「イ 思考力・判断力・表現力等」が具体的に示されている。こうした構造は大項目C・Dも同様である。

## 三 資料の読み取りと「問い」の表現

「(1)近代化への問い」では、資料を扱い、近代化に伴い生活や社会が変化したことを読み取ったりまとめたりする学習活動を行う。取り上げる資料としては、学習指導要領には、「交通と貿易」「産業と人口」「権利意識と政治参加や国民の義務」

## B 近代化と私たち

### (1) 近代化への問い

- ア (資料から情報を読み取ったりまとめたりする技能)
- イ (思考力・判断力・表現力等→問いの表現)

### (2) 結びつく世界と日本の開国

- ア (知識)
  - (ア) 一八世紀のアジアや日本における生産と流通, アジア各地域間やアジア諸国と欧米諸国の貿易など→一八世紀のアジアの経済と社会を理解
  - (イ) 産業革命と交通・通信手段の革新, 中国の開港と日本の開国など→工業化と世界市場の形成を理解
- イ (思考力・判断力・表現力等)
  - (ア) (主題を設定) →一八世紀のアジア諸国における経済活動の特徴, アジア各地域間の関係, アジア諸国と欧米諸国との関係などを考察・表現
  - (イ) (主題を設定) →アジア諸国と欧米諸国との関係の変容などを考察・表現

### (3) 国民国家と明治維新 (略)

### (4) 近代化と現代的な諸課題

- (「自由・制限」「平等・格差」「開発・保全」「統合・分化」「対立・協調」などの観点から主題を設定→諸資料を活用して, 追究したり解決したりする活動)
- ア (知識) 現代的な諸課題の形成に関わる近代化の歴史
- イ (思考力・判断力・表現力等) 主題について考察・表現

図2 「B 近代化と私たち」の内容

「学校教育」「労働と家族」「移民」などの例示がある。このうち、「交通と貿易」を取り上げた場合は、貿易額や貿易品目の推移を示す資料、鉄道の敷設距離の推移や航路の拡大と所要日数の推移を示す資料、工場数の推移を示す資料などを示し、教師が「なぜ、鉄道や航路が発達したのか」、「どのような貿易が行われていたのか」などの学習課題を提示して、生徒に資料を読み取らせたり、まとめさせたりする。

学習活動で扱う資料は、文字資料だけでなく画像や遺物など多岐に及ぶが、とりわけ統計資料は今まで以上に活用する場面が増えることが想定され、その面からの教科書や補助教材の充実が望まれる。また、資料読み取りの技能については、大項目Aの「(2)歴史の特質と資料」を受けて、B・C・Dで身に付けさせ、さらに「日本史探究」や「世界史探究」につなげて習熟させていくことが求められている。

生徒は、資料を読み取ったりまとめたりする学習活動の中で、興味・関心を持ったこと、疑問に思ったこと、追究したいことなどを挙げる。これを学習指導要領は「問いを表現する」と呼んでおり、こうした「問い」を通して学習内容への課題意識を育むことをねらいとしており、生徒が身に付けるべき思考力・判断力・表現力はここで示されることになる。

#### 四 資料を活用した主題学習

「(2)結び付く世界と日本の開国」と「(3)国民国家と明治維新」には、生徒に理解させる目標が示されている。紙幅の都合上、(2)についてのみ述べるが、ここでは一八世紀のアジアや日本における生産と流通、アジア各地域間やアジア諸国と欧米諸国の貿易などを基に「一八世紀のアジアの経済と社会」、産業革命と交通・通信手段の革新、中国の開港と日本の開国などを基に「工業化と世界市場の形成」を理解させることが求められている。学習内容を知識面から見れば、概念的な理解を目的としてかなり絞り込まれており、従来の世界史Aや日本史Aとの違いは明白である。

さらに、これを主題学習で行うことが求められている。「一八世紀のアジアの経済と社会」について言えば、「なぜ、日本や中国で手工業生産が発達したのか」、「アジアではどんな貿易が行われていたのか」、「アジアの経済は欧米の経済にどのような影響を与えたのか」などの主題を設定し、資料を活用して生徒に多面的・多角的に考察・表現させる。主題の設定は教師が行うが、「(1)近代化への問い」で生徒が表現した「問い」を十分踏まえることが大切であり、教師が複数の主題を提示し、生徒がその中から選択するというような形になるのであろう。ま

た、学習のねらいに即した考察のためにどのような資料を準備するのか、というところに大きなポイントがあると思われる。

主題学習は、学習指導要領では早くも昭和三十五年版の世界史Bに登場しており、昭和四十五年度からは、世界史・日本史ともに「内容の取り扱い」で示されている。しかし、あくまでも通史学習の補完という位置付けであった。その後、平成十一年版で初めて世界史・日本史ともに「内容」の大項目に明示され、関心・意欲を高め学び方を習得する項目として設定された。平成二十二年版もそれを踏襲していたが、今回の改訂は、さらに、通史学習から主題学習に舵を切ったところに大きな特徴があると言える。

#### 五 歴史の大きな変化と現代的な諸課題

「(4)近代化と現代的な諸課題」は、言わば大項目Bのまとめにあたり、(1)から(3)までの学習などを基に、「自由・制限」「平等・格差」「開発・保全」「統合・分化」「対立・協調」などの観点から主題を設定し、諸資料を活用して、追究したり解決したりする活動を行う。ここでも(2)、(3)の学習と同様に、教師が複数の主題を提示し、生徒がその中から選択するというような形になるのであろう。生徒は事象の背景や原因、結果や影響などに着目して、アジア諸国とその他の国や地域の動向を比較し

たり、相互に関連付けたりするなどして、主題について多面的・多角的に考察・表現することで、現代的な諸課題の形成に関わる近代化の歴史を理解するのである。

おわりに

「歴史総合」の年間指導計画を考えると、二単位で六〇時間を確保できたとして、Aに六時間配当した場合、B・C・Dはそれぞれ一八時間ということになる。そのうち、(1)と(4)にそれぞれ一〜二時間配当すると、(2)・(3)はそれぞれ七〜八時間、その中で二つの主題学習を行うことになる。当然ながら、従来のような通史学習を可能にする時間はなく、生徒の考察の前提となる知識をどのように組み立てていくのかが大きな課題となる。そうした点を踏まえた教科書の編集も進められていることと思うが、現場でも念頭に置いておくべきことと思われる。

#### 参考文献・資料

- 「高等学校学習指導要領 地理歴史科」(二〇一八年七月、文部科学省ホームページで公開、二〇一九年五月三十一日現在)。  
初等中等教育局教育課程課教育課程企画室「高等学校学習指導要領の改訂について」(文部科学省教育課程課編「中等教育資料」平成三〇年六月号、学事出版株式会社、二〇一八年六月)。

- 藤野敦ほか「高等学校学習指導要領の改訂と地理歴史科の展望」(文部科学省教育課程課編「中等教育資料」平成三〇年八月号、学事出版株式会社、二〇一八年八月)。  
菲塚雄一「新学習指導要領「歴史総合」で高等学校歴史の授業はこう変わる」(『社会科教育』五六―一、明治図書出版、二〇一九年一月)。

(しもやま・しのぶ／東北福祉大学教育学部教授)